

町史のひとこま (第三十回)

須恵の眼科医 ⑤

目養生

ちもいました。

江戸時代、須恵村に高場眼科(のち岡と姓を改める)があり、上須恵村には田原眼科がありま

した。いずれも福岡藩医(いわゆる御典医)で、殊に田原眼科は参勤交代で江戸に赴き、江戸で名をあげた医者でした。

村に有名な眼科医がいたことで、両村は特異な歴史をたどることになりました。村には店がないのが普通で、行商人が入り込むことも規制されたほどでしたが、両須恵には例外的に店の存在を許されています。村人が農耕にたずさわったのはもちろんですが、須恵村と上須恵村には治療客のための宿屋を兼ねる人が多かったのです。このほか、眼科医から製法を学び、許可を得て製薬・売薬に従事する人た

博多柳町の妓楼大坂屋の遊女に。しきの目養生の記録を見てみましょう。

柳町遊女須恵村へ目養生に参り申す事

宝暦六年(一七五六)七月廿五日

一、柳町大坂屋甚右衛門より御願申し上げ候は、抱(かかえ)にしきと申す遊女、眼氣(目の病氣)に御座候て、殊の外難儀に指し及び居り申し候に付き、須恵村に養生に指し越し申し度く願ひ奉り候。尚又、往來行駄御免の願、指し出し申し候に付き、手紙相添え、直ちに御役所へ差し出し申し候ところ、早速右両用共に願の通り、御免仰せ付けられ候事。

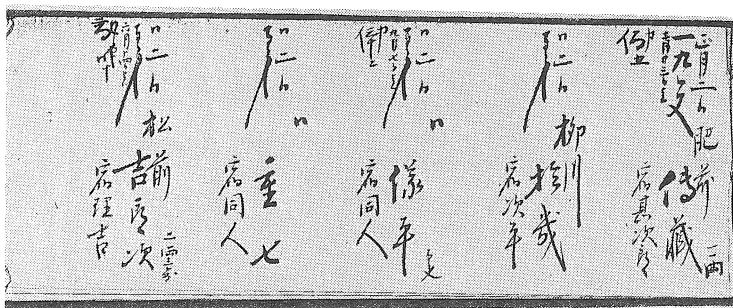
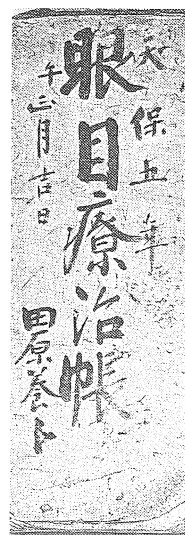
と書かれています。治療客に宿を提供することで村民の生活が成り立っていた(かまどに火が入った)という意味です。このように、遠方から泊まりがけで眼病の治療に来ることを、当時の言葉で「目養生」と言っています。

博多の遊女も来る

眼療宿場

これは一例ですが、このよう

に全国から治療を受けに来る人。来た人もいますが、これは当時のための宿屋が発達し、資料館では「眼療宿場」と呼んで、歴史の保存につとめています。治療客の中には「松前」から



天保5年(1834)の眼目療治帳とその一部(田原養卜の分)。「松前」から来た人物の名が見える。

Table listing names and locations from the ledger: 肥前 傳藏, 柳川 於哉, 儀平, 重七, 松前 吉郎次, 宿理吉.